



赤ちゃんにおむつはいらぬ —失われた育児技法を求めて

三砂ちづる 編著

四六判・上製・309ページ

本体2000円+税

勁草書房

TEL 03-3814-6861

<http://www.keisoshobo.co.jp/>

子どもにも自分にも 気持ちのいい子育てを 楽しむには

「赤ちゃんにおむつはいらぬ」というと、何か特殊な育児方法やラディカルな話かなと感ぜられる方が多いのではないだろうか。じつは私も、最初はそのようだった。編者の三砂氏は、二〇〇六年度トヨタ財団研究助成「赤ちゃんにおむつはいらぬ—失われた身体技法を求めて」の主任研究者である。「やり手水」^{ちやうず}は今や死語になつている言葉だそうだが、ご存知だろうか。赤ちゃんをトイレやおまる、庭などに「ささげて」おしっこをさせてあげることだそう。昭和初期まで普通に使用されていたという。

「おむつなし育児」の生後二か月の赤ちゃんが昼寝から目覚め、お母さんが「おしっこだよねー」といいながらトイレでささげてあげると、すぐにおしっこをする。つまり、赤ちゃんが排泄について、言葉ではつきりといえなくとも、お母さんが赤ちゃんの排泄したいというサインを読み、あるいは体の動きから察して、タイミングを見ておまるに座らせたり、ささげてあげたりする。それは、月齢の低いときからやってみることが可能であり、それを

「おむつなし育児」と呼ぶそうである。戦前の雑誌『主婦の友』には、「赤ちゃんにおむつをつけるのは悪い習慣です」「おむつは二か月でとりましょう」等の記事が載っている。赤ちゃんは、本当はおむつを当てられるのはいやなのだが、使っているとおむつで排泄することに慣れてしまう。「それは悪い習慣づけ」とためらいもなく書いてあるという。ほんの六十年前の話だが、にわかに信じがたい。

昭和三十年代をすぎると小児科医や心理学者が登場し、心身の発達から考えて、二歳より早くおむつを取らうとすると、子どもの負担になるという科学的知識が、世代を超えて受け継がれてきた知恵を凌駕する。

戦後、五年、十年単位でおむつはずしの時期は遅れていく。昭和三十年代には「一歳の夏までに」といわれていたが、紙おむつの普及とともに二歳、三歳、幼稚園に入るまで、と遅れてきたのは、我々も実感しているところだ。

トイレトレーニングというが、「おむつなし育児」はトレーニングではない。赤ちゃんの排泄のサインやタイミ

ングを母親や周りの人間が感じ取る、コミュニケーションのプロセスにポイントがある。ある母親の感想に「失敗しても成功しても、排泄を気にかけるということは、より子どもを見て、さらには心と通じ合おうとするわけで、愛情の底力が鍛えられているような気がしてなりません」とあるのが象徴的であり、印象的だった。

高齢者への実際の聞き取り、育児書等の記事の変遷、保育園や家庭でのおむつはずしの実態、東南アジアのおむつはずし、おむつなし育児の実践として、モンテッソーリ教育のエミール保育園、三木成夫の生命形態学の講演の会場であった、さくらんぼ保育園、さらには、おむつなしクラブでの四十組の親子の実践、そして最後に、知恵の伝承と多岐に渡り、内容も濃く深い。

特殊な保育の話ではなく、子育ての本質、根源にかかわる話であり、また現代社会における子育ての問題点に対する古くて新しい切り口ともいえる。

「おむつなし育児」を実践する、しないにかかわらず、ぜひ一読を！

(全私保連広報部・村井祐昭)